

大学生の職業選択未関与におよぼす自己効力感と 親や友人からのサポートの影響

松田由希子・前田健一

Influences of self-efficacy and supports from parents and friends on undergraduate students' vocational commitment

Yukiko Matsuda and Kenichi Maeda

本研究では、大学生の職業選択において重要な段階とされる関与段階には親や友人からのサポートおよび自己効力感がどのように影響しているのかについて検討した。大学生 165 名を対象に質問紙調査を実施した。質問紙は、親からのサポート、友人からのサポート、自己効力感、未関与に関する 4 つの測度から構成された。親や友人からのサポートは自己効力感を介して未関与に影響すると仮定したモデルを検証するため、共分散構造分析を行った結果、十分な適合度が得られた。パス係数を男女別に算出したところ、男女共に自己効力感は未関与に有意な負の影響をおよぼすことが示された。また、男性の場合には親からのサポートのみが自己効力感に有意な正の影響をおよぼすのに対して、女性の場合には友人からのサポートのみが自己効力感に有意な正の影響をおよぼすことが示された。以上の結果から、大学生が職業選択において積極的に関与するためには自己効力感を高める必要があること、さらに、自己効力感を高めるためには男性ならば親からのサポート、女性ならば友人からのサポートが有効であることが示唆された。

キーワード：職業選択、未関与、自己効力感、親や友人からのサポート、大学生

問題と目的

学生から社会人への移行時期にある大学生にとって、卒業後の職業を選択することは、主要な発達の課題の一つである (Super, 1957 日本職業指導学会誌 1960)。しかし、職業選択が満足のいく結果に終わる者もいれば、何らかの理由から本来の希望とは異なる職業を選択せざるを得ない者もいるだろう。このように、職業選択という課題の解決結果が人によって異なることには、一側面として職業選択への取り組み方の違いが反映されているのかもしれない。

例えば Harren (1979) は、職業選択を一連の意思決定プロセスとして捉え、個人内外の要因が絡むことによってこのプロセスには個人差が生じることを提唱した。彼によると、職業選択は認識 (awareness)、企画 (planning)、関与 (commitment)、遂行 (implementation) の 4 段階から成る。彼

のモデルに従うと、それぞれ次の段階へ移行するには先行する段階を完了している必要がある。そのため、満足はいく遂行結果を得られるかどうかは、関与段階における処理の程度に左右されると考えられる。つまり、関与段階の規定要因を明らかにすることによって、満足はいく遂行結果を得られる者とそうでない者の違いを推測できると思われる。

関与段階は、具体的に言うと、ある程度絞り込んだ職業を自己概念に統合し、その職業の肯定的評価を多く取り入れ、その職業を目標とした計画を立てる段階である。これまでに、親や友人からのサポートとの関連が検討されており、親からのサポートと友人からのサポートは共に関与を促進する要因であることが示されている (Felsman & Blustein, 1999; Leal-Muniz & Constantine, 2005; Wolfe & Betz, 2004)。また、親や友人からのサポートは、関与段階に移行するためには欠かせない自己探索や環境探索などの探索行動 (Felsman & Blustein, 1999; Ketterson & Blustein, 1997; Kracke, 2002; Vignoli, Croity-Betz, Chapeland, Fillipis, & Garcia, 2005)、および職業選択における自己効力感とも関連することが示されている (Ryan, Solberg, & Brown, 1996; Turner & Lapan, 2002; Wolfe & Betz, 2004)。

自己効力感とは、そもそも Bandura (1977) による自己効力理論において提唱された概念であり、他者からのサポートや奨励を情報源として増大することが理論づけられている。この概念を Taylor & Betz (1983) が職業選択の理論に適用したことから、それ以後、身近な他者からのサポート (Ryan et al., 1996; Turner & Lapan, 2002; Wolfe & Betz, 2004) や探索行動 (安達, 2001; Blustein, 1989) との関連について検討されてきた。

以上のように、親や友人からのサポート、自己効力感、および関与状態との間に何らかの関連があることはいくつかの先行研究 (Felsman & Blustein, 1999; Leal-Muniz & Constantine, 2005; Ryan et al., 1996; Turner & Lapan, 2002; Wolfe & Betz, 2004) から示唆されている。しかし、それらの研究は、親や友人からのサポートと関与状態との関連 (Felsman & Blustein, 1999; Leal-Muniz & Constantine, 2005; Wolfe & Betz, 2004)、ならびに親や友人からのサポートと自己効力感との関連 (Ryan et al., 1996; Turner & Lapan, 2002; Wolfe & Betz, 2004) をそれぞれ単独に検討したにすぎず、親や友人からのサポート、自己効力感、および関与状態の総合的な関係性、あるいは親や友人からのサポートと自己効力感から関与状態への影響過程について明らかにしていない。類似の研究 (Guay, Senecal, Gauthier, & Fernet, 2003; Nota, Ferrari, Solberg, & Soresi, 2007) では、親や友人からのサポート、自己効力感、および職業未決定の関係性について検討しており、親や友人からのサポートは自己効力感を介して職業未決定に影響をおよぼすことを明らかにしている。このことから、自己効力感や親や友人からのサポートによる関与状態への影響を媒介すると予想される。そこで本研究では、親や友人からのサポート、自己効力感、および関与状態をまとめて取り上げ、親や友人からのサポートと自己効力感から関与状態への影響過程について Figure 1 に示すモデルを検証することを第一目的とする。

さらに、サポート研究 (例えば、福岡・橋本, 1997; 久田・箕口・千田, 1989; 嶋田, 1996) の多くは、サポート知覚の程度や期待するサポート源に男女差があることを示唆している。サポート知覚の程度は一般に男性よりも女性の方が高いとされている (福岡・橋本, 1997; 久田他, 1989; 嶋田, 1996)。また、大学生が期待しているサポート源を男女別に調べた久田他 (1989) の研究では、男性

にとって母親からのサポートへの期待が最も高く、女性にとって友人からのサポートへの期待が最も高いことが示されている。しかし、職業選択研究において、親や友人からのサポートの影響を男女別に検討した研究は今のところ行われていない。そこで本研究では、職業選択においても親や友人からのサポート知覚の程度や、自己効力感に対するサポートの影響に男女間で違いがみられるのかどうかを明らかにすることを第二目的とする。職業選択研究において、現時点では各サポート源に対して期待するサポート内容について測定できる標準化された尺度が見当たらない。したがって、本研究ではまず、予備調査を実施して大学生が職業選択の際に必要なとしている親および友人からのサポート内容を明らかにする。その結果に基づいて、独自の職業選択サポート項目をサポート源ごとに作成する。

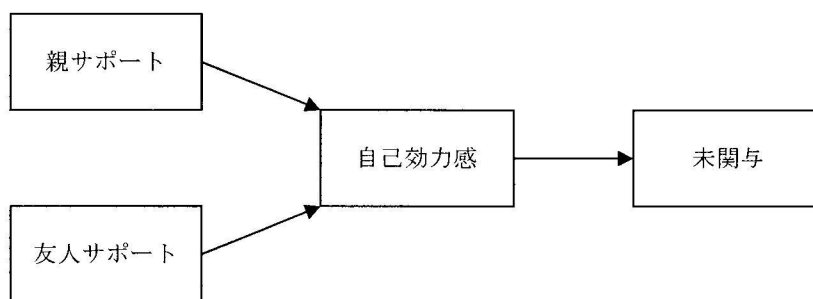


Figure 1 本研究で検証する媒介過程モデル

予備調査

方法

対象者 大学3、4年生35名（男性11名、女性24名）を調査対象とした。平均年齢は20.66歳（ $SD=0.84$ ）であった。

実施時期 2007年6月に調査を実施した。

手続き 講義時間の一部を利用した。受講生に調査用紙を配布した後、その場での回答を依頼し、回収した。

調査内容 1. 職業選択における親へのサポート期待：「今後、進路選択や職業選択をするときに、あなたが親から援助してもらいたいことは何ですか。」という質問文を提示し、最大3つまで自由記述で回答するよう教示した。

2. 職業選択における友人へのサポート期待：「今後、進路選択や職業選択をするときに、あなたが友人から援助してもらいたいことは何ですか。」という質問文を提示し、最大3つまで自由記述で回答するよう教示した。

結果

親や友人へのサポート期待に関する自由記述を、内容が類似するものごとにまとめ、カテゴリに

分類した。

親へのサポート期待 回答の多い順に、「相談相手・聞き役」「金銭的援助」「情報提供・アドバイス」「励まし・支え」「理解・尊重」「その他」の6カテゴリに分類した (Table 1)。

友人へのサポート期待 回答の多い順に、「情報提供・アドバイス」「相談相手・聞き役」「励まし・支え」「協力」「気分転換」「その他」の6カテゴリに分類した (Table 2)。

Table 1 親へのサポート期待に関する自由記述の分類結果

カテゴリ名	回答数	回答例
相談相手・聞き役	12	相談にのってもらいたい 話をきいてほしい
金銭的援助	12	交通費が足りない時は援助してもらいたい 資金
情報提供・アドバイス	10	親の目線から見た就職や企業についての情報 自分の経験からアドバイスしてほしい
励まし・支え	10	応援してもらおう 悩んでいる時の後押し、はげまし
理解・尊重	5	自分の就業への理解 自分の選択を尊重してくれること
その他	4	県外に出してもらえるかの承諾 種々の契約

Table 2 友人へのサポート期待に関する自由記述の分類結果

カテゴリ名	回答数	回答例
情報提供・アドバイス	25	情報を教えてもらいたい アドバイスがほしい
相談相手・聞き役	15	相談相手になってもらいたい 自分の話を聞いてもらう
励まし・支え	7	励まし合い 後押し
協力	4	一緒に頑張る 一緒に考える
気分転換	3	自分が辛い時の気分転換につきあってほしい 気分転換と一緒に遊びたい
その他	1	家の提供

項目作成 親からのサポートと友人からのサポートのそれぞれについて、自由記述を基に「その他」を除く各カテゴリにつき2~4項目を作成した。その結果、親からのサポート項目も友人からのサポート項目もそれぞれ計13項目となった。

本 調 査

方法

対象者 大学生165名(男性84名,女性81名)を調査対象とした。その内訳は,大学2年生52名,3年生113名であった。平均年齢は,20.26歳($SD=0.90$)であった。

調査時期 2007年7月に調査を実施した。

手続き 講義時間の一部を利用した。受講生に調査用紙を配布した後,その場での回答を依頼し,回収した。

調査内容 1. **親からのサポート**: 予備調査で作成した13項目を使用した。項目は,“私の保護者は,私の行動を尊重してくれる”,“私の保護者は,いろいろな経験について教えてくれる”,“私の保護者は,私にとって必要な経費をまかなってくれる”などであった。職業選択をするときに,対象者の保護者が各項目に記されたサポートをしてくれると思う程度について,それぞれ1(全くない)から5(非常にある)までの5段階評定で回答を求めた。13項目について因子分析(主因子法)を行い,1因子を抽出した(Table 3)。対象者ごとに1項目あたりの平均値を算出し,親からのサポート得点とした。

Table 3 親からのサポート項目

項目内容	F1	共通性
6. 私の保護者は, 私の話をきちんと聞いてくれる。	.78	.61
4. 私の保護者は, 私が悩んでいるとき後押ししてくれる。	.77	.60
5. 私の保護者は, 私の考えを理解してくれる。	.77	.59
13. 私の保護者は, 私のことを信頼してくれる。	.75	.57
9. 私の保護者は, 私が落ち込んでいるとき励ましてくれる。	.75	.57
1. 私の保護者は, 私が困っているとき相談にのってくれる。	.73	.54
12. 私の保護者は, 私のことを応援してくれる。	.72	.52
8. 私の保護者は, 保護者の立場からアドバイスしてくれる。	.69	.48
10. 私の保護者は, 私の行動を尊重してくれる。	.67	.44
3. 私の保護者は, いろいろな経験について教えてくれる。	.66	.44
11. 私の保護者は, 私にはっきりと意見を言ってくれる。	.64	.41
2. 私の保護者は, 私にとって必要な経費をまかなってくれる。	.46	.21
7. 私の保護者は, 私の生活費を出してくれる。	.42	.18

2. **友人からのサポート**: 予備調査で作成した13項目を使用した。項目は,“私の友人は,私が困っているとき相談にのってくれる”,“私の友人は,私の息抜きに遊んでくれる”,“私の友人は,私の知らない情報を教えてくれる”などであった。職業選択をするときに,対象者の友人が各項目に

記されたサポートをしてくれると思う程度について、それぞれ1（全くない）から5（非常にある）までの5段階評定で回答を求めた。13項目について因子分析（主因子法）を行い、1因子を抽出した（Table 4）。対象者ごとに1項目あたりの平均値を算出し、友人からのサポート得点とした。

Table 4 友人からのサポート項目

項目内容	F1	共通性
13. 私の友人は、私と一緒に考えてくれる。	.83	.69
3. 私の友人は、私が悩んでいるとき後押ししてくれる。	.80	.64
2. 私の友人は、私の話をきちんと聞いてくれる。	.80	.64
9. 私の友人は、私が落ち込んでいるとき励ましてくれる。	.79	.63
8. 私の友人は、私が困っているとき相談にのってくれる。	.79	.62
5. 私の友人は、私と一緒に頑張ってくれる。	.71	.50
12. 私の友人は、私に友人自身のことを話してくれる。	.60	.37
11. 私の友人は、私の息抜きに遊んでくれる。	.58	.34
4. 私の友人は、私がわからないことを教えてくれる。	.55	.31
6. 私の友人は、私の気分転換につき合ってくれる。	.53	.28
10. 私の友人は、私と一緒に勉強してくれる。	.52	.27
1. 私の友人は、私の知らない情報を教えてくれる。	.52	.27
7. 私の友人は、私にはっきりと意見を言ってくれる。	.47	.22

3. 自己効力感：Career Decision-Making Self-Efficacy Scale（Taylor & Betz, 1983）から17項目を抽出し、邦訳して使用した。項目は、“自分の能力に合うと思う職業を選択する”、“自分が興味をもつ職業についてインターネットなどで情報を集める”、“将来どのような生活がしたいかをはっきりさせる”などであった。各項目に記された行動をする自信の程度について、それぞれ1（全く自信がない）から5（非常に自信がある）までの5段階評定で回答を求めた。因子分析（主因子法）を行い、1因子を抽出した。因子負荷量の低かった3項目を除く14項目を分析に使用した（Table 5）。対象者ごとに1項目あたりの平均値を算出し、自己効力感得点とした。

4. 関与状態：Vocational Exploration and Commitment Scale（Blustein, Ellis, & Devenis, 1989）の19項目を邦訳して使用した。項目は、“やりたい仕事がいくつもあるので進路を決定するのは困難である”、“自分の興味や適性がよくわからないので進路を選択できない”、“特定の進路計画を実行するのは不安である”などであった。各項目に記された内容が対象者の考えにあてはまると思う程度について、1（全くあてはまらない）から7（非常によくあてはまる）までの7段階評定で回答を求めた。因子分析（主因子法）を行い、1因子を抽出した。因子負荷量の低かった3項目を除く16項目を分析に使用した（Table 6）。この尺度は評定値が大きいほど未関与の状態であることを示す。対象者ごとに1項目あたりの平均値を算出し、未関与得点とした。

Table 5 自己効力感項目

項目内容	F1	共通性
11. 自分の能力に合うと思う職業を選択する。	.79	.62
6. 自分の興味に合うと思う職業を選択する。	.78	.60
5. 自分が就きたい職業（職種）の仕事内容を知る。	.70	.49
1. 自分の望むライフスタイルに合った職業を選択する。	.70	.49
15. 将来どのような生活がしたいかをはっきりさせる。	.65	.42
7. 目標とする職業に就くために、大学院や専門学校に通う必要があるかどうかを決定する。	.58	.34
13. いくつかの職業の中から1つの職業を選択する。	.54	.29
10. 自分が興味をもつ職業に就いている人と話をする機会をもつ。	.53	.29
14. 今後5年間の目標を設定し、それにしたがって計画を立てる。	.53	.28
4. 自分の能力を的確に評価する。	.48	.23
2. アルバイトなどでの経験を将来の目標と結びつけて考える。	.48	.23
12. 自分が興味をもつ職業についてインターネットなどで情報を集める。	.46	.21
9. 自分が興味をもつ職業をいくつか挙げる。	.43	.19
8. 両親や友人が勧める職業でも、自分の能力ではできないと思うものであれば断る。	.40	.16

注) 除外した3項目は、“3. 最初に希望していた職業に就けなかった場合、代わりに適当な職業を選択する。”、“16. 近年の雇用傾向を把握する。”、“17. 大学にある学生就職課やキャリアセンターを活用する。”であった。

Table 6 未関与項目

項目内容	F1	共通性
10. 自分は将来どうしたいのかがはっきりしないので進路を選択できない。	.79	.62
18. 自分のやりたい仕事ははっきりしない。	.78	.61
11. 重要な進路決定をするのは困難である。	.77	.60
17. 自分にとって有効な進路決定ができるか心配である。	.77	.60
9. 自分の興味や適性がよくわからないので進路を選択できない。	.73	.54
7. もっと他により選択肢があるかもしれないので進路を決定するのは不安である。	.71	.50
15. 特定の進路計画を実行するのは不安である。	.69	.48
13. いくつかの選択肢に直面した場合、進路を決定するのは困難である。	.69	.47
8. 特定の進路目標について重点的に考えることができない。	.67	.45
6. 特定の職業を選択するのは不安である。	.66	.44
1. 最終的には自分が最もやりたい仕事に辿りつけるだろう。(R)	.58	.33
12. 興味のある職業に関する情報が不足している。	.52	.27
14. 進路目標を達成する能力に自信がある。(R)	.48	.23
3. やりたい仕事はいくつもあるので進路を決定するのは困難である。	.44	.20
19. 自分の望む職業の競争率が高くなったら、計画を立て直す。	.43	.18
4. 興味のある職業に関する情報をもっている。(R)	.42	.17

注) 除外した3項目は、“2. 進路を決定する前に自分の興味や適性についてよく考える必要がある。”、“5. 自分の望む職業に就くために、いくつかの障害を乗り越えなければならない。(R)”、“16. 特定の進路目標を達成するためにしっかりと取り組む。(R)”であった。

結果

記述統計量 親からのサポート、友人からのサポート、自己効力感、未関与の各平均得点と標準偏差、および各変数間の相関係数を男女別に算出した (Table 7)。

Table 7 男女別の各変数の相関係数, 平均得点, および標準偏差

	1	2	3	4	男性 M (SD)	女性 M (SD)
1. 親からのサポート	—	.06	.36**	-.09	3.83 (0.64)	4.14 (0.66)
2. 友人からのサポート	.24*	—	.11	-.04	3.83 (0.52)	4.16 (0.56)
3. 自己効力感	.21	.27*	—	-.55**	3.56 (0.60)	3.45 (0.60)
4. 未関与	-.14	-.06	-.64**	—	3.87 (0.95)	4.22 (1.11)

注1) 相関係数は上段が男性, 下段が女性。注2) * $p < .05$, ** $p < .01$ 。

男女差の検討 親からのサポートおよび友人からのサポートにおいて男女間に差異がみられるかどうかを検討するため, 各得点について t 検定を行った。その結果, 親からのサポート得点 ($t(163) = 3.07, p < .01$) および友人からのサポート得点 ($t(163) = 3.98, p < .001$) の両方で有意差がみとめられた。いずれも男性より女性の得点の方が有意に高かった。各サポート得点に男女差がみとめられたため, 以後の分析では男女別に検討することとした。

影響過程の検討 親や友人からのサポートから未関与への影響を自己効力感が媒介すると仮定したモデルを検証するため, 共分散構造分析を行った。その結果, 男女全体のデータで十分な適合度が得られた ($\chi^2 = 3.551, p = .470; GFI = .989; AGFI = .947; RMSEA = .000$)。パス係数を男女別に算出したところ, 男性に関して, 親からのサポートから自己効力感への有意な正のパス ($\beta = .36, p < .001$), および自己効力感から未関与への有意な負のパスがみとめられた ($\beta = -.54, p < .001$) (Figure 2)。一方, 女性に関して, 友人からのサポートから自己効力感への有意な正のパス ($\beta = .23, p < .05$), および自己効力感から未関与への有意な負のパスがみとめられた ($\beta = -.64, p < .001$) (Figure 3)。

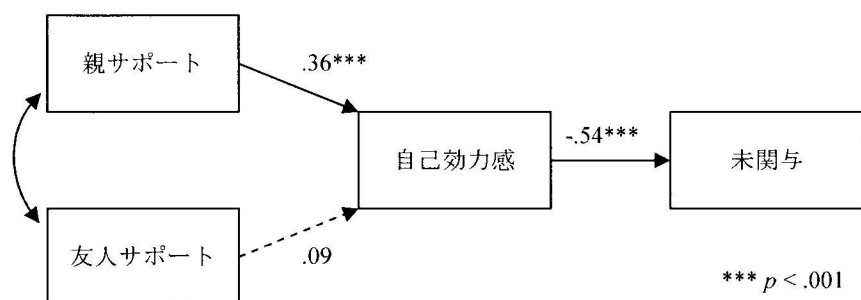


Figure 2 共分散構造分析結果 (男性)

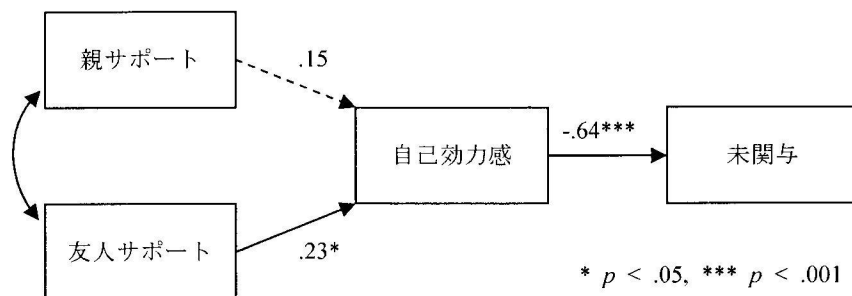


Figure 3 共分散構造分析結果（女性）

総合考察

本研究の目的は、第一に、親や友人からのサポートは自己効力感を介して関与状態に影響すると仮定したモデルを検証することであった。第二に、親や友人からのサポート知覚の程度や、自己効力感に対するサポートの影響が男女間で異なるのかどうかを明らかにすることであった。

親や友人からのサポートおよび自己効力感から未関与への影響は、まずサポートから自己効力感へ、次いで自己効力感から未関与へという過程をたどることがわかった。つまり、サポートは関与を直接促進しないが自己効力感を増大させ、間接的に関与を促進することが示唆された。親や友人からのサポートから未関与への影響を自己効力感が媒介するという影響過程は、親や友人からのサポートは自己効力感を介して職業未決定に影響をおよぼすことを示した先行研究（Guay et al., 2003; Nota et al., 2007）の結果と一貫するものであった。

これまで、自己効力感と関与状態との直接的な関連については検討されてこなかったが、本研究において、自己効力感は無関与に直接影響をおよぼすだけでなく、サポートから無関与への影響を媒介するという点で、関与にとって重要な要因であることが示唆された。近年では、各学校段階においてインターンシップ体験やコンピュータを用いたキャリアガイダンスによって自己効力感を増大させる試みが始められている（例えば、城, 2007; 下村, 2007）。今後はこれら現行の試みと併せて、サポート利用可能性の低い者には補助的なサポートを提供するなどの働きかけを積極的に行っていくことが有効であると考えられる。

一方で、本研究の結果は、親からのサポートは無関与状態に直接影響をおよぼすという研究結果（Leal-Muniz & Constantine, 2005）とは矛盾するものであった。研究結果間の矛盾の原因として考えられるのは、調査対象者を取り巻く環境の相違である。まず、Leal-Muniz & Constantine (2005) は、メキシコ系アメリカ人大学生を調査対象としていた。アメリカ在住のメキシコ系アメリカ人は、貧困、不安定な家族構造、不十分な教育など、職業選択に不利な生活環境の中で職業選択を迫られる（McWhirter, Hackett, & Bandalos, 1998）。つまり、職業選択における障害を多く抱えた上、支援体制

の乏しい状態にある者にとっては、親との話し合いの機会や親からの理解が関与において重大な役割を担っていると思われる。

それに対して、本研究の対象者が通う大学では、就職支援に力が入れられており、多くの学生に活用されている（田中, 2006）。つまり、本研究の対象者にとっては、親や友人からのサポートよりも大学における充実した支援体制の方が関与に役立ったと思われる。今後は、職業選択に対する社会的背景や支援体制が異なる集団を対象にして、サポートから関与状態への影響のしかたについて相違点や類似点を明らかにしていく必要があるだろう。

親からのサポートと友人からのサポートの利用可能性の知覚には男女間で有意差がみとめられ、いずれにおいても男性よりも女性の方がサポート利用可能性を高く知覚していることが示された。この結果は先行するサポート研究（例えば、福岡・橋本, 1997; 久田他, 1989; 嶋田, 1996）の結果とも一致しており、自己効力感へのサポートの影響について男女別に検討することの必要性が確認された。

自己効力感に対するサポートの影響は男女間で異なるのかについて検討したところ、サポートの受け手が男性の場合には、親からのサポートが自己効力感に正の影響をおよぼすことが示された。親からのサポートは、対象者に対する信頼と尊重、問題の共有とアドバイス、および必要な経費などの内容を含んでいた。つまり、男性は職業選択において、親からの実用的なサポートを自信につなげていると示唆された。

それに対して、サポートの受け手が女性の場合には、友人からのサポートが自己効力感に正の影響をおよぼすことが示された。友人からのサポートは、対象者への励まし、気分転換へのつき合い、協調性などの内容を含んでいた。つまり、女性は職業選択において、友人からの心理的なサポートを自信につなげていると示唆された。これらの示唆にしたがうと、大学生の職業選択に対する自己効力感を増大させるためには、男性であれば親からのサポートの利用可能性を高めることが有効であり、女性であれば友人からのサポートの利用可能性を高めることが有効であると結論づけられた。

ただし、本研究の対象者は全体的にサポートの利用可能性を高く知覚しており、サポート利用可能性の知覚が低い大学生はあまり含まれていなかった。これでは、職業選択におけるサポートの効果について全容を明らかにしたことにはならない。したがって、今後はサポート利用可能性を低く知覚している大学生を対象にした場合にはどのような結果が得られるのかについても検討しなければならないだろう。

引用文献

- 安達智子 (2001). 大学生の進路発達過程—社会・認知的進路理論からの検討— 教育心理学研究, **49**, 326-336.
- Bandura, A. (1977). A self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, **84**, 191-215.
- Blustein, D. L. (1989). The role of goal instability and career self-efficacy in the career exploration process.

- Journal of Vocational Behavior*, **35**, 194-203.
- Blustein, D. L., Ellis, M. V., & Devenis, L. E. (1989). The development and validation of two dimensional model of the commitment to career choice process. *Journal of Vocational Behavior*, **35**, 342-378.
- Felsman, D. E., & Blustein, D. L. (1999). The role of peer relatedness in late adolescent career development. *Journal of Vocational Behavior*, **54**, 279-295.
- 福岡欣治・橋本 宰 (1997). 大学生と成人における家族および友人についての知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果 心理学研究, **68**, 403-409.
- Guay, F., Senecal, C., Gauthier, L., & Fernet, C. (2003). Predicting career indecision: A self-determination theory perspective. *Journal of Counseling Psychology*, **50**, 165-177.
- Harren, V. A. (1979). A model of career decision making for college students. *Journal of Vocational Behavior*, **14**, 119-133.
- 久田 満・箕口雅博・千田茂博 (1989). 大学生におけるソーシャル・サポートに関する研究 (1) 日本心理学会第 53 回大会発表論文集, 314.
- 城 仁士 (2007). インターンシップ体験が就職活動に対する自己効力感に及ぼす影響 日本教育心理学会総会発表論文集, **49**, 671.
- Ketterson, T. U., & Blustein, D. L. (1997). Attachment relationships and the career exploration process. *The Career Development Quarterly*, **46**, 167-178.
- Kracke, B. (2002). The role of personality, parents and peers in adolescents career exploration. *Journal of Adolescence*, **25**, 19-30.
- Leal-Muniz, V., & Constantine, M. G. (2005). Predictors of the career commitment process in Mexican American college students. *Journal of Career Assessment*, **13**, 204-215.
- McWhirter, E. H., Hackett, G., & Bandalos, D. L. (1998). A causal model of the educational plans and career expectations of Mexican American high school girls. *Journal of Counseling Psychology*, **45**, 166-181.
- Nota, L., Ferrari, L., Solberg, V. S., & Soresi, S. (2007). Career search self-efficacy, family support, and career indecision with Italian youth. *Journal of Career Assessment*, **15**, 181-193.
- Ryan, N. E., Solberg, V. S., & Brown, S. D. (1996). Family dysfunction, parental attachment, and career search self-efficacy among community college students. *Journal of Counseling Psychology*, **43**, 84-89.
- 嶋田洋徳 (1996). 知覚されたソーシャルサポート利用可能性の発達的变化に関する基礎的研究 広島大学総合科学部紀要IV理系編, **22**, 115-128.
- 下村英雄 (2007). 中学校におけるコンピュータを活用したキャリアガイダンスが進路自己効力感に与える影響 教育心理学研究, **55**, 276-286.
- Super, D. E. (1957). *The psychology of careers: An introduction to vocational development*. New York: Harper & Brothers. (スーパー D. E. 日本職業指導学会 (訳) (1960). 職業生活の心理学—職業経歴と職業的発達— 誠信書房)
- 田中秀利 (2006). 広島大学におけるキャリア支援—平成 10 - 18 年度総括及び教育科目「職業選択と自己実現」の記録 広島大学キャリアセンター

- Taylor, K. M., & Betz, N. E. (1983). Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision. *Journal of Vocational Behavior*, **22**, 63-81.
- Turner, S., & Lapan, R. T. (2002). Career self-efficacy and perceptions of parent support in adolescent career development. *The Career Development Quarterly*, **51**, 44-55.
- Vignoli, E., Croity-Belz, S., Chapeland, V., Fillipis, A., & Garcia, M. (2005). Career exploration in adolescents: The role of anxiety, attachment, and parenting style. *Journal of Vocational Behavior*, **67**, 153-168.
- Wolfe, J. B., & Betz, N. E. (2004). The relationship of attachment variables to career decision-making self-efficacy and fear of commitment. *The Career Development Quarterly*, **52**, 363-369.